No.3

mi·ra·i·e

つなごう・未来へ

出版に働くものだからこそ、できること

2015年4月10日発行

編集・発行　出版労連（日本出版労働組合連合会）〒113-0033　東京都文京区本郷4-37-18 いろは本郷ビル2階

TEL 03-3816-2911　FAX 03-3816-2980　E-mail rouren@syuppan.net　URL http://www.syuppan.net/

「道徳」は必要ですか？

道徳には“正解”はありません

大久保　徳枝（三省堂労働組合）

道徳の“徳”を名前に持つ人間として、この漢字からは決して逃げることができません。私的には名前負けしている感が強いのですが。「心が正しくて、おこないが人の道にあっていること」と辞書には書かれていますが、重いですよね。では“道”とは「人間がそれにしたがっておこなわなければならないことがら」だそうです（『三省堂国語辞典』より）。

さて私は、“威張らず、大きな声も出さず、決して子どもを叱らない”。こんな明治生まれの教育者を父に持ち、その父が私の道徳の先生でした。

父と子ども6姉妹の間では三つの暗黙の約束がありました、①人に迷惑をかけない②目立つことをしない③強い自己主張をしない。どこの親も子どもに対して言うことですが、②と③は父独特の考えだったと思います。

父の場合は自らが身をもって子どもたちに教えました。子どもの帰宅が遅くなると、ほかの家族は食事を済ませますが、父は何時になろうと必ず遅い子どもと一緒に食事をとります。叱ることもしません。これは①に関係した約束ですが、子どもにとっては非常に厳しかったです。叱られたほうがすっきりするのですが。②については子どもたちの協調性を求めていたようです。③については、穏やかな片田舎育ちなので問題はない約束でした。しかし、私はこの凄まじい社会に負けないよう、年齢を重ねるたびに強くなっていきました。そして、社会人になってからは、会社や社会や同居人と対等になるために、知恵をつけていきました。その結果が今の姿です。

また、父は差別・区別を嫌いました。大きい子も小さい子も関係なく、家事は全員に分

担させ、食事も全員が同じ量の副食が一人ひとり盛られました。だからこんなに育ってしまったのかもしれません。

さて、私も小・中学校のとき、道徳という「時間」がありました。しかし、その時間は何をしたのか、いろいろと記憶をたどってみますが思い出せません。ただうっすらと思い出すのは、苦痛ではなく楽しくて自由で“ラッキー”的な時間だったような気がします。しかし、その道徳を文部科学省は教科化し、子どもたちの心の中を土足で歩こうとしています。そして、子どもの心に傷を残そうとしています。個人の自由や尊厳より、おおやけへの忠誠心が重要なのでしょう。国民だからみな同じ価値観を持たなければならないとは、国民を見下した傲慢な考えであります。

道徳は外的な状況に左右されない内面的なものと考えられています。これが内心の自由です。ここには教育を利用して文部科学省であっても、入り込むことはできないはずです。

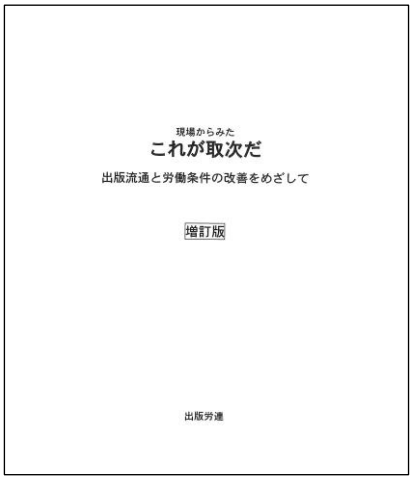
前述しましたように、私たちは幼い頃から社会で生きて行くうえで、家庭や地域や社会から、様々な経験と学習によって道徳的な判断を発達させてきました。押しつけられてきたものではありません。政府はいじめや校内暴力、時として発生する青少年の凶悪犯罪などの問題と絡めて教科化を提言していますが、そんな話ではありません。小学校時代私はいじめっ子をみんなの前でいじめていましたので、私のまわりにはいじめられっ子が隠れていました。いじめってその程度です。

また、教科化になると最も信頼のない、出版物で最近さらに国の関与を強めている“検定教科書”というものを使用することになり、本質からはさらに乖離していきます。

道徳には“正解”はありません。一生正解はないものであり、ましてや点数なんてつけられるものではないのです。国家的道徳観で、いろいろな状況や物事を判断されたのではたまったもんじゃありません。

現場からみた　これが取次だ

出版流通と労働条件の改善をめざして　増訂版



頒価 200 円
発行 出版労連
TEL 03-3816-2911
FAX 03-3816-2980

このパンフは取次労働者自身が、自らの労働と闘いの中から作りました。だからこその取次の差別取引や、労働現場の実態です。非正規労働者の置かれた過酷な現実と当事者の叫びは、取次の真実を白日の下にさらします。必読！

●おもな内容●

●取次とはなにか
●仕入れ・配本、そして書店に出荷するまで
●出版流通における返品の流れと二つの制度
●取次の差別取引の実態
●出版物流近年の動き
●非正規労働者に支えられている取次の現場　その労働実態
●追補：取次の非正規労働者のメッセージ

道徳は必要です

――ただし子どものための理想と目標を誤らざれば

佐藤　勝大（光文書院労働組合ある時は道徳副読本編集者）

「道徳」は、授業である「道徳の時間」と学校教育全体で行われる道徳の指導である「道徳教育」とを分けて称している。週１時間の「道徳の時間」（授業）は道徳教育の中心（要）を担うが、学校教育全体で行う「道徳教育」に内包される一部でもある。今回の「道徳の教科化」でも「道徳教育は特別の教科である道徳を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであ」り、とされている。つまり、教科化されるのは「道徳の時間」（授業）であり、教育活動全体で行う「道徳教育」は概ね現状を踏襲していくようだ。

さて、私が現在編集で関わっている先生は、「道徳教育」と真剣に向き合っている方々ばかりだ。先生方からは教科化強硬派から感じるキナ臭さ（修身回帰的なモノ）は微塵も感じられない。教科化一連の動きに政治圧力はあっただろうから、危機感を抱き備える必要はある。しかし、これまでも思想信条のバランス感覚をもった先生方が、高い理想と教育理念のもと、ひたすらに児童生徒の成長を願い道徳を行ってきた。「教師と子どもが真剣に向き合い、共に学び成長する場」である道徳の実践を多く目にしてきた。この存在抜きに「道徳」の善し悪しを語る風潮は、いささか疑問を感じる。「道徳」はきちんと行えば、総合的な人間学習として、大きな意味をもって機能する教育なのである。彼らの指導する子どもたちの目を見れば、「道徳」を忌み嫌う必要がないことを理解できるはずだ。

総じて、道徳に無心で取り組む先生方は「教科へ格上げ」に違和感を覚えている。元から教科と教科以外の領域の間に「格」は存在せず、そうした視点から考えると、「格上げ」は誠に胡散臭い表現だ。これは「いじめ問題」「凶悪犯罪若年齢化」等の社会問題を道徳教育の不備に帰し、利用するための詭弁だと思う。不十分な道徳教育＝格下として、そこから問題が生じたように感じさせたいのだろう。

「教科化反対」を否定はしない。当然不安も心配も懸念もある。しかし、ここに至って「教科化実施」「廃止」が短期間に起これば、明らかに学校は混乱する。それが心配。教員児童生徒、振り回される側は非常に迷惑なことだろう。教育にこれ以上政治的思惑が染み出したり、介入が起こったりしないよう注意し、それを防ぐことを第一とし、教育の場を見守ることは必要だ。そして、でき得る支援を考え行っていくべきであろう。危険な方向へ『学習指導要領』の解釈が向かうのを防ぎ、それを実行させない活動である。

最後に「評価」の問題について言及しておく。実は、現行の『学習指導要領』でも「評価」について表記されている。そこには「数値などによる評価は行わない」とある。『学習指導要領解説道徳編』に詳しくあるが、「評価」の仕方なども示されている。「評価」についての議論は、こうした既にあるものをあらためて認識し、これから出てくる文科省の新しい指針を比較し確認する必要がある。「数値評価がされないこと」が引き継がれることは、既に示されているが、「評価の問題」と、それによる「教員への負担」について、今後どのように捉えそして考えるかは、現況も把握しておく必要があるのだ。再確認になるが、現在でも道徳の「評価」は行うものなので、単純な「負担増」論や「内面の評価」論をやみくもに行うべきではない。先行の中央教育審議会答申の内容なども踏まえたうえで慎重に批評を行わなければ、十分な意味をなさない。

兎にも角にも、「道徳」を一つの学問として、活用している教員がいることを忘れず、頑なな否定、妄信的な肯定、そのどちらも避け、子どものためとなる議論をしていただきたい。

道徳の教科化と教科書に対する安倍政権の「期待」

吉田　典裕（出版労連教科書闘争本部長）

編集部から与えられたテーマは「道徳は必要ですか」というものだった。まさか労働組合の発行物でそんな抽象論を、しかも素人が展開することが企画の趣旨ではないだろうと思うので、「道徳の教科化は必要か」という意味であろうと解釈することにする。

私は――そして出版労連の基本方針でもあるのだが――道徳教育全否定論に立つものではない。強力な留保をつけたうえでだが、道徳教育は必要だろうと思うのである。そのことを踏まえて言えば、道徳の教科化の最大の問題は、国家が「善し」とする価値観を子どもたちに強制することであり、したがってそれには強く反対する。以下、その立場で話を進めることにする。

過去の「道徳の教科化」への動き

戦前の道徳教育のあり方は、ある意味で透明だった。道徳の根源は天皇で、その命令によって命を投げ出す兵士をつくることにその目的があることは誰にでも明白だった。いうまでもないが、それは「教育勅語」に明示され、学校で徹底された。

これが戦後否定され、日本国憲法とその理念の実現を「教育の力にまつ」1947 年教育基本法によって、「道徳は教育の全体を通じて行う」、つまり教科として道徳を行うことはなくなった、はずだった。しかし A 級戦犯の岸信介が政権の座に就いたように、戦争責任が曖昧にされたまま戦後の政治過程は進む。

この関係は学習指導要領の扱いに反映する。1958 年にはそれまで「試案」だった学習指導要領が「法的拘束力を有する」ものへと逆転する。「道徳の時間」が新設されたのはこのときだった。とはいえ、「道徳の時間」といういかにも中途半端なものになったのは、国民の反対の声を聞かないわけにはいかなかったためである。このときの道徳は、その後出された中央教育審議会答申「期待される人間像」（1966 年）に見られるように、復古主義の色彩が濃いものであった。

新自由主義徹底の方策としての道徳

現在すすめられている道徳の教科化にも復古的＝「修身」的要素は色濃くあるが、見落としてならないのは、その新自由主義的性格である。それは道徳の教科化を求めているのが復古主義的勢力＝教科書攻撃派だけではなく、日本経団連など財界もその有力な主張者であるからである（例えば提言「次代を担う人材育成に向けて求められる教育改革」2014.4.15）。

文部科学省の副教材（事実上、国定教科書扱いされている）『私たちの道徳』の「肝」の一つが「法やきまりを守れ」ということである。それに基づいて「集団の中で自分の役割を果たせ」という（例えば同書中学校版 p.168 を見よ）。およそ子どもを主権者として扱うのではなく操作の対象と見ていることを示しているが、これは兵士の「倫理」であると同時に、企業の従業員への経営者の要求でもありうる。復古主義と新自由主義の要求は必ずしも矛盾しないのである。言い換えれば労働組合への加入を心理的かつ事前に阻害する「治安対策」（佐貫浩・法政大学教授）である。

安倍政権が教科書に「期待」していること

このような内容の道徳教育を徹底させるための保障が検定教科書の導入である。安倍政権が教科書に期待する役割はこれである。何しろ学校教育第 34 条によって、学校（義務教育諸学校及び高等学校）では検定教科書を使用しなければならないことになっているのである。一方、子どもにとっても、結局のところ教科書が学習材の中心になっている現実がある。

権力者が植えつけたい道徳（徳目）を徹底するのにこれほど強力なメディアはないだろう。

不道徳者が道徳を叫ぶ

これはブラックジョークか？

里村　兆美（全国保険医団体連合会　出版部）

私は全国の医師・歯科医師でつくる団体で月刊誌の編集を担当しています。道徳とは少し異なりますが、医療の分野では「倫理」について考えさせられることが度々あります。出生前診断等の生殖医療、臓器移植や、遺伝子解析など、技術の発展にともない、単純に目の前の患者の求めに応じて処置すればよい、命を存続させればよい、というだけでは対処できない問題が生じているためです。またこれらの高度先進医療に限らず、実際の医療現場では日常的にさまざまな問題と選択に迫られますが、そうした時、「倫理的・法的・社会的課題」を考慮することが求められます。

法的課題は、単に現行法に照らして合法か違法かというだけにとどまりません。代理出産やトランスジェンダーなど、問題になることの多くは立法時点で想定されていない事態であり、国境を越えて取り組まなくてはならない課題も含まれます。

社会的課題は、その医療行為の先にある社会的影響です。出生前診断は障害者の存在の否定につながるのではないか、臓器移植は人身売買につながるのではないか、ゲノム遺伝子解析は結婚や就職での差別につながるのではないか、等々が議論になります。

そして倫理的課題。これが非常に重要で、また最も難しいのではないかと思います。

世界医師会（WMA）は、「倫理は法よりも高い基準の行為を要求し、時には、医師に非倫理的行為を求める法には従わないことを要求する」とし、拷問などの非人道的行為を弾劾する責任を医師に課しています。ある医療行為が合法か否かであれば、それに則った「正しい行動」は明確ですが、「倫理に則った正しい行動」は、多くの議論のうえでいまだ答えの出ていない問題も多く、日常診療で直面する倫理的課題も、関係者のさまざまな価値がぶつかり合う中で、こうすれば正解、という一つの答えはありません。

今、深刻ないじめなどの問題で道徳教育の不十分さが背景にあるとして、学校教育における道徳の教科化が進められようとしています。医療の分野でも、医学生に十分な時間と資源を使って倫理を学ばせる必要があるという認識は世界中で高まっており、WMA や世界医学教育連盟などの団体からも、そうした勧告が出されています。

そこでは基本的人権への配慮や献身的な専門職意識など医の倫理の基本原則と同時に、これらの原則を現実に適用するには、多様な価値など、さまざまな困難な状況があることを理解し、ケーススタディを重ねて、実際に問題に直面した際には原則に立ち返って合理的に対処することが期待されています。

なるほど学校の授業の中で、人権や公正さ、異なる価値の存在を理解し、尊重するという基本原則を学び、それにかかわる課題について考え、意見を交わすのは意味あることだと思います。でも、今の教育制度や政府の行いを見れば、真の道徳教育ができるとは思えません。「愛国心」を強要し、歴史をゆがめ、格差を広げ、原発や沖縄の米軍基地問題、特定秘密保護法、医療や労働政策など、あらゆる方面において人権侵害と不公正のオンパレードですが、それでどうやって道徳教育を行うというのでしょうか。しかも、その「道徳」に照らして、時には法に従わないことも要求するとすれば―。まるでブラックジョークです。

Morality の訳としての「道徳」は必要か、と問われれば、必要だと答えます。しかし、政府が正解を定めるような、教科としての道徳が必要かと問われたら、これは全力で「不要」と言わなければなりません。

道徳は必要ですか？　はい。もちろん！

小野　孝則（原発問題委員会）

「道徳は必要です。道徳とは価値判断の基礎となりますし、円滑に社会生活を送るための規範でもあります。」終わり。

と、ここで終わると叱られちゃいますね。もう少し、言葉を足してみたいと思います。

例えば、「エスカレーターに乗るときに片側を空ける」は、急いでいる人に配慮して、“追い越し車線”を設ける道徳的行為です。でもエスカレーターの駆け降り等は、安全上の問題がありますよね。機械の保守上も好ましくないと聞いたことがあります。でも、みんな片側を空けます。私も空けています。

不思議なことに、「片側空け」は関東では右側を、関西では左側を空けるそうです。そして、東から西へ移動した人は右から左へ、西から東へ移動した人は左から右へ、空ける側を変えているはずです。どこにもそんな決まりはないのですが、みんな、なんとなくそうしているみたいです。

さて、ちょっとインターネットの話題におつきあいください。「炎上」についてです。

仮に A 君としましょう。彼がインターネットに「反発を招くような発言」を書き込んだとします。それを見た人々は「道徳」的な観点から、それを非難し、謝罪を要求し、A君の人格を否定するような書き込みもします。そして、この状況はネットワークを伝播し、これまではA君の存在さえ知らなかった人たちにも及び、激情的な書き込みをする人が多数でてきます。時にはA君の住所や勤め先などが暴かれてしまうことさえあります。これが「炎上」です。

「炎上」は、「道徳」的問題を指摘する書き込みがなされ、それを見た人が補強したり繰り返しの書き込みをしたり、ということが発端になります。もちろん、「A君が悪いから」こうなるのですが、さて、その人たちはA君の書き込みが嫌なのでしょうか？　それともA君の存在が？　面識はない人が多数ですから、A君の存在が、とは思えないのですが。

「炎上」も人格攻撃にまで及んでくると、リンチの様相を呈してきます。しかし、炎上させている人たちにその自覚があるのかは微妙なところです。たぶん、「みんなのいう通り道徳上正す必要があるのだ」という正義のもとにそれが行われているからでしょう。

さて、「道徳」とは何か、正体が少し見えてきました。それはきっと「場の空気」です。

エスカレーターの空いている側で立ち止まるのは「場の空気が読めていない」行為です。そしてA君も「社会の空気が読めない人」ですね。一方、彼の掲示板を炎上させている人たちは「ネットの空気を読んで」いるのです。

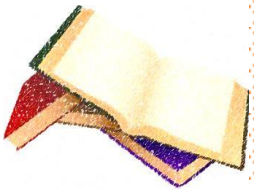
さて、私たちは「空気を読む」とき、それを構成する要素を吟味し判断しているでしょうか？　ちなみに、私自身はできていません。

実際、私にとって「空気を読む」ことは、思考停止の一形態にほかなりません。「道徳」という仮面をかぶった「空気」は、白紙の価値基準や規範であり、それはいちいち吟味せず、感情で判断するためのものなのです。

「感情による判断」では、外部からの情報や周りの状況により価値基準や規範が変わります。これがエスカレーターの乗り方ぐらいであれば無害なのですが。

さて、複数のメディアが「道徳」を背景に誰かを激しく攻撃しているときがあったら、「炎上」という言葉を思い出し、そして「道徳」や正義を声高に叫ぶものを見てください。激情的に訴えていませんか？　そこに問題の本質はあるでしょうか？

そう。絶対的価値に見えて、実は移ろいゆく「道徳」は私たちの目を曇らせないための良い目印なのです。必要ですよね。



『巨怪伝―正力松太郎と影武者たちの一世紀』

佐野眞一 著　1994 年 11 月　2427 円＋税　文藝春秋
（2000 年に文春文庫上下 2 冊発行）

正力松太郎といえば、「読売新聞」＆「プロ野球」のイメージが強い。しかし、戦前は警察官僚であり虎ノ門事件（皇太子・摂政宮裕仁親王・後の昭和天皇の狙撃未遂事件）で職を追われている。そして倒産寸前の読売新聞に乗り込み、戦後になって大衆の欲望をつかむ革新的な紙面を作り出し、のし上がっていく。その過程は、日本の戦後の大衆化の流れとリンクしている。

正力は、戦後「原子力の父」といわれ初代の原子力委員会委員長に就任した。しかし、正力の原子力推進の影武者だった日本テレビの柴田秀利氏の動きも興味深い。1955～56 年には、日本の反核運動に危機感を持ったアメリカとともに各地で「原子力平和利用博覧会」の開催を仕掛け、原子力エネルギーがもたらす明るい未来を PR した。被爆地・広島での開催でも延 11 万人の観客を動員したという。

日本テレビ系でも制作された『鉄腕アトム』も「妹はウランちゃん、兄はコバルト兄さん」であり、当時のメディアは「原子力の平和利用」というイメージをばらまき続けた。原発の「安全神話」の形成にメディアはどう荷担したのか？　マスコミの持つ役割と意味をあらためて考え直した。

『原発・正力・CIA―機密文書で読む昭和裏面史』（有馬哲夫著、2008 年、新潮新書）という本も出ている。正力が戦後の公職追放から復権し、日本テレビ、プロレス、原子力発電所などのパイオニアとして名声を高め、史上唯一のプロ野球天覧試合を成功させる。正力の戦後の来し方から「戦後も連綿と続くアメリカの支配」を感じ取ることはできないか。日本は、いまだに「基地」と「原発」を止められない。来し方行く末を考えると、2011 年 3 月 11 日以後の日本の大衆は、どう動いていくのだろうか？　（山下一行）

編　集　後　記

「道徳」という言葉によって浮かんで来るのは、「嘘」に関わるいくつかの故事・警句ではないでしょうか。まず誰もが、「嘘つきは泥棒の始まり」という言葉を、幼い頃から何度も聞かされたのを思い出すことでしょう。やがて、成長して判断の自由が広がるにつれて、「嘘」は等し並みに悪いのではなく、「嘘も方便」とか「美しい嘘」について納得せざるを得なくなったはずです。時には、「嘘からから出たまこと」を体験する機会もあったかもしれません。ことほどさように、「嘘」という言葉一つをとってみても、時と場合とによって正邪は一定しません。結局、社会生活を営むうえで必要な、いつでもどこでも求められる原則がある一方で、もう片方には、価値の逆転を強いる可能性のある現実があるというほかなさそうです。では、全ては相対的で、それゆえ道徳は無意味なのでしょうか。そうではなく、やはり生きてゆくには「思いやり・共感」は欠かせず、それが一人よがりなものにならないために「独立自尊」の精神があり、道徳とはその時々の状況に応じて、双方のバランスを考える力を養うということになりそうです。そうしたプラグマティックな属性を持たざるを得ない「道徳」を「教育」することについて、原理的・歴史的に考えてみました。

福島発リレーエッセイ『被災と向き合う日常から』㉚

再びの原発事故を覚悟しますか

浅田　真理子（田村市都路⇒石川県金沢市に避難）

1995 年、東京でのサラリーマン生活にピリオドを打ち、念願の田舎暮らしを始めた。小さな区民農園との出会いが高じて、自分の土地で自分の思うように農作物を育てたい。それが阿武隈高地への移住となった。

それまで都会しか知らなかった私にとって阿武隈の自然は見るものすべてが新鮮だった。次々と咲く山野草。木々たちは個性的な芽吹きに始まり四季折々の美しさを展開する。そこに棲む虫、鳥、小動物などの営みも興味津々。まさに、それら多くの生物とともに生きているという喜びを感じながらの生活だった。そこは、私にとって天国ともいえる場所であり、満ち足りた日々だった。「自然農」で米、雑穀、豆、野菜を育て、山の恵みである山菜や木の実、きのこもたくさんいただいた。ストーブで穏やかに燃える薪も自ら山で伐採し、蓄えた。食料も燃料も水もある。災害には強いと自負していた。

原発の近くに移住してはじめて原発が怖いものだと知り、時間の許す限り反対行動にも参加してきたが、今思えばやはり「安全神話」にのせられていた。チェルノブイリで消えた村の話は知っていてもそれがどういうことなのか実感していなかった。まさかついのすみかとして選んだ地に放射能が降るとは考えてもいなかった。

悲しいのはこれだけの事故があったのに世の中が全く変わらないということだ。むしろ最も望まない形が進行しているように思えてならない。除染しても一般公衆の被ばく限度の年間1ミリシーベル以下にはならず、それでも帰還政策が進められる。福島県内では何もなかったかのように復興への掛け声が聞こえてくる。イベントが次々と開催され、食物の地産地消も当たり前になっている。

一方、自らつくりあげた「安全神話」に胡坐をかき、安全対策を二の次にしてきた東京電力や政府は責任をとっていない。検察もその罪を問わず被災者の心を踏みにじっているとしか思えない。そしてまた、原発再稼働が現実になろうとしている。新規制基準に適合しているからといって原発が安全になったわけではない。事故を起こさないことが前提になっていない。

人々に問いたい。「再びの原発事故を受け入れる覚悟はできていますか？」「フクシマの哀しを味わう覚悟はありますか？」と。

フクシマを無駄にしないでほしい。切なる願いだ。